

A Report of the Special Exhibition by Students at Kanazawa University Museum in 2021, “The force of light”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: TADA, Haruka, TSUBAKINO, Tomoyuki, NAKAGAMI, Yuga, MATSUNAGA, Atsushi, KAWAI, Nozomu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00069248

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



学生による企画展の報告「光をシコウする」

A Report of the Special Exhibition
by Students at Kanazawa University Museum in 2021,
“The force of light”

多田 明加(1)、椿野 智之(2)、中神 悠雅(3)、松永 篤知(4)、河合 望(5)

TADA Haruka, TSUBAKINO Tomoyuki, NAKAGAMI Yuga,
MATSUNAGA Atsushi, KAWAI Nozomu

(1) 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館・金沢大学大学院 人間社会環境研究科 博士前期課程

Fukui Prefectural Ichijodani Asakura Family Site Museum.

Master's Course, Graduate school of Human and Socio-Environmental, Kanazawa University

(2) 東北大学大学院 文学研究科 博士前期課程

Master's Course, Graduate school of Arts and Letters, Tohoku University

(3) 金沢大学大学院 自然科学研究科 博士前期課程

Master's Course, Graduate school of Natural Science and Technology, Kanazawa University

(4) 金沢大学資料館

Kanazawa University Museum, Kanazawa University

(5) 金沢大学 新学術創成研究機構 金沢大学資料館 教育・展示部門長

Institute for the Frontier Science Initiative and Kanazawa University Museum, Kanazawa University

Abstract

This article aims to evaluate the exhibition “The force of light” at Kanazawa University (15/11/2021-19/01/2021) by the students who actually organized this exhibition program from its beginning to the end. Kawai and Matsunaga introduce this article, presenting the background of the special exhibition by the students at Kanazawa University as a part of the class “Practical Museum Training” and the overview of the class schedule. Tada introduces Chapters 2 and 5, Tsubakino introduces Chapters 3 and 6, Nakagami introduces Chapter 4. In Chapter 2, Tada explains the idea of this exhibition, and describes on the exhibition devices in Chapter 5.

In Chapter 3, Tsubakino provides the selection and the research of the materials and discusses related events in Chapter 6. In Chapter 4 Nakagami focuses on the display of the exhibition. Finally, Matsunaga, who cooperated as a curator of Kanazawa University Museum, considers the significance of the special exhibition conducted by the students in the University Museum.

1. はじめに－博物館実習と学生による企画展

金沢大学では2014年以来、博物館学芸員資格履修科目の「博物館実習」の授業の一環として学生による企画展を開催してきた。文部科学省による博物館実習ガイドライン（2009年度版）では2単位相当の学内実習および1単位相当の館園実習が推奨されている¹。開始当初の学生企画展は、学内実習の一部として位置づけられ、館園実習は学外の博物館・美術館で行われていたが、金沢大学資料館が2016年4月に北陸の大学で初めて博物館相当施設に指定され、学生企画展の内容も館園実習の内容に匹敵することから、金沢大学資料館の協力で2019年度より学生企画展の実施を以て館園実習を行ったことになると認定された。

金沢大学資料館は、1989年の開館より学芸員養成課程への協力と連携を行ってきたが²、学生による企画展が開催されたのは2014年度の「植物図「館」」が最初である³。自然豊かな角間キャンパスにちなんで植物をテーマとしたもので、以降、翌2015年度には「寒潮事件」と恋愛に着目した「破かれた恋愛小説～『寒潮』に翻弄された四高生」⁴、2016年度には本学が所蔵する物理実験機器を紹介した「ハカリモノ－文系学生が紹介する科学実験機器」⁵、2017年度には北溟寮閉鎖を承けて100年以上に及ぶ本学学生寮の歴史・伝統を紹介した「バンカラ寮生類」⁶、2018年度には金沢大学資料館所蔵資料の「数奇な」来歴にスポットライトを当てた「物録－資料たちの波瀾万丈な「モノ」ガタリ」⁷、2019年度には赤・青・金の3色に分けた資料について彩色技術や原材料などを紹介することを目的とした「いろは－多彩な技術から見る色の世界－」⁸、2020年度には草野写真コレクションと医学部記念館所蔵資料を通して医学類の前身校の歴史を紹介する「写真で見る前身校Part II～キンダイ医学の源流を辿る～」⁹と続いた。

本稿で論じるのは、2021年度開催の8度目の学生企画展「光をシコウする」である。2021年度も引き続きコロナ禍の中にあっただが、前年度のような登学禁止には至らなかったため、第1クォーターから対面授業での実習とし、学生が完全に主体となる従来スタイルの学生企画展を目指すことにした。すなわち、コロナ禍前の学生企画展のように、学生が自らタイトル・テーマを決め、展示資料を調査・選定、展示構成を考えて会場設営し、それに伴う様々な制作物を自作することにしたのである。第1・2クォーターに新型コロナウイルスの感染流行の波が訪れたこともあったが、河合が学生を複数の教室に分けて密を避けた上でZoom接続することを提案し、対面形式の実習を維持し続けた。それが功を奏して、学生の議論や作業は一度も止まることはなかった。そして初期の議論で決まったテーマが、金沢大学と旧制第四高等学校ゆかりの資料を通して「光」を多角的な視点で紹介する「光をシコウする」なのである。シコウ＝「四高」・「試行」・「志向」・「思考」と、例年のように掛け言葉を組み込んだものではあったが、簡潔ですっきりしたタイトルとなった。

タイトル・テーマが決まった後、実習生は資料・キャプション班、デザイン班、展示班の3班に分かれ、それぞれの役割分掌に基づいて本企画展のアイデアを討議することに授業時間を費やした。7月には学芸員に不可欠な資料の取り扱いについての実技実習も行ったが、その間も企画展について議論をしながら作業を続け、内容を固めていった。そもそも「光」とは何なのか、各章タイトルの「シコウ」にふさわしい語はどれなのかなど、かなり深い議論が行われ、担当教員としても感心させられるものがあった。各班の主な作業としては、資料・キャプション班は資料の選定・調査とパネル・キャプションの内容作成、デザイン班はビジュアルイメージも含めたポスター・チラシ・パネル・キャプション等の作成、展示班は什器選定・展示配置等の展示計画の作成を行った。なお、これらの作業は、夏季休業期間も含めて進められたことを明記しておく。特に10月の第3

クォーターに入る頃には新型コロナウイルスの感染流行が下火になっていたことから、本企画展はほぼ通常開催することを決め、11月15日の開催まで急ピッチで作業が行われた。企画展に伴う教育普及活動については、前年度同様ミュージアムツアーとその動画配信を行うことにした。ミュージアムツアーにあたっては、5つの班を改めて編成した。そして、12月13日～12月17日の昼休みに1回ずつ、計5回のツアーを開催し、その動画を12月下旬に学生自ら編集して年明けに動画投稿サイトに配信した。これらの取り組みも、博物館における教育普及活動のみならず、動画を用いた発信の仕方を学ぶ良い機会となったと考える。なお、前年度のミュージアムツアーはコロナウイルス対策で学内者限定としたが、今回は感染者数が比較的少なくなった時期の開催となったため、ツアー参加者に制限は設けなかった。その後、感染流行第6波が訪れ、学生による撤収作業だけは断念した。

今回の学生企画展は、前年度に引き続きコロナ禍での準備となり、いつ急な予定変更になってもおかしくない不安な状況での作業となったが、27名の実習生がそれぞれの役割を全うし、素晴らしい企画展を開催することができたと評価したい。実習生の大半が卒業論文の執筆を抱えていた4年生であり、その中で一通りの学芸員業務を進めた彼らに敬意を評したい。なお本稿では、次の第2章で多田が学生企画展の流れについて、第3章で椿野が資料調査と展示資料の選定について、第4章で中神が展示室の構成と設営について、第5章で多田が展示に関する制作物について、第6章で椿野が教育普及活動の実施について、それぞれ自身の実体験も踏まえて論じる。そして、末尾の第7章で資料館所属担当教員である松永が結論も兼ねて全体を振り返り、大学附属の資料館で学生による企画展を行う意義について考察する。

最後に、教員として実習に関わる際に留意した点を記したい。一点目として、金沢大学の博物館実習では学生の能動的な活動を確保するためアクティブ・ラーニング方式を採用してきた。2021年度の実習生は27名であり、これを資料・キャプション班、デザイン班、展示班の3班に編成した。毎週の授業では、1限から2限にかけて議論・作業（約165分）→議論・作業の報告（15分）」というサイクルを繰り返し、学生が主体的に取り組めるよう、教員は各班のアドバイザーや全体のオブザーバーの立場に徹した。この方式に促されて学生の問題解決能力・調査能力・ディスカッション能力はもとより、コミュニケーション能力までもが飛躍的に向上したと思われる。さらに、前年度の実習生であった大学院生1名をティーチング・アシスタントして配置し、当該院生には自らの経験に基づき実習生に懇切丁寧なサポート・アドバイスをしてもらった。

二点目は、班体制と役割分掌を明確化することに意を注いだ。実習生は前述の通り27名3班編成である。各人が担当する業務の進捗は各班長により把握され、各班の議論・作業の進捗は全体リーダーによりマネジメントされる。企画展オープニングまでのタイトなスケジュールが学生の焦りに拍車をかけたことも否めないが、展示までの準備期間を通じて学生の主体性と責任感において著しい成長が見られた。今年度の実習生は人数が多く、作業量の均等化には限界があったが、リーダー・班長同士は常に連携を心がけており、3つの班は比較的良く機能していた。

三点目はテクニカルな点である。金沢大学の博物館実習では、これまでもSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）やクラウド・サービスを活用してきた。今回も特にLINEを活用して、円滑に情報の連絡、共有が進められた。学生の自主的な会議に、LINEが加わることで、学生間の連携が促進・強化されたものとする。またGoogleドライブのようなクラウド・サービスも有効に活用され、遠隔地にいても文書や図、写真などの各種データを共有しながら作業を進めることができた。これは、コロナ禍においては特に有効な手段であった。

四点目はコロナ禍における博物館展示の工夫である。前述のように2021年度の学生企画展では、ミュージアムツアーの動画配信を行った。これにより、コロナ禍の不安で足を運ぶことを躊躇する学内外の方々にも、広く学生企画展の関心を喚起することができた。また、企画展会場ではソーシャル・ディスタンスと順路を示すフロアマーカーを設置するなど、来館者が密にならないような工夫も見られた。実習生は、コロナ禍のような想定していない状況下における博物館展示の工夫について学ぶことができた。

金沢大学では博物館実習を受講するには原則として実習以外の博物館関係科目を全て履修していることが条件となっている。そのため、必然的に実習生の大半が4年生になる。実習生は就職活動や教育実習、そして卒業論文という学生生活の大きな山場に直面する。また博物館実習を終えたとしても、学芸員として採用される学生は稀である。こうした忙しきや採用条件の厳しさにもかかわらず、博物館実習で企画展に取り組む意義とは何か。第一に、博物館実習を通じて、学生の学習効果や人格的成長に留まらず、学生生活を通じて何事かを成し遂げたという達成感にある。第二には、博物館実習を通じて博物館学芸員の業務を一通り経験することにより「ミュージアム・リテラシー」とでも呼ぶべきものを身につけた人材を世に送り出すことにある。博物館は一般に資料の収集・保存・研究の場と捉えられがちである。しかし、ミュージアム・リテラシーを身につけた人材を輩出することは、将来、博物館が豊かな生涯教育の場として市民生活に根付いていく一助となるのではないかと考えている。本学の博物館実習は、資料館スタッフの献身的なご協力のおかげで、学生企画展を通じて「生きた」実践的博物館実習を提供することができているとも言えよう。

(河合・松永)

2. 学生展の流れ

本章では学生企画展「光をシコウする」のテーマ選定と準備作業、企画、企画展開催後の成果について述べる。その中でも特に、企画展のテーマとコンセプトの決定に至る経緯と、実習生の活動日程を詳述し、展示資料の調査、展示室の構成と展示作業、展示に関する制作物、関連企画等の実施の詳細については、次章以降に譲る。

(1) 学生企画展に向けた班設置

学生企画展に向けて、2021年4月から活動を始めた。まずは木曜1・2限の博物館実習の授業時間内で企画展を行う上での注意事項等を実習生全体で共有した。その後、2020年の実習報告書を参照した上で、実習生の班分けを行った。構成は資料・キャプション班、展示班、デザイン班の3班とした。資料・キャプション班は資料調査およびパネル、キャプションの原稿の執筆を担当した。展示班は展示室の構成計画を担当した。デザイン班は、キャプション・パネル等の制作物を担当した。今季の企画展に携わった実習生は計27名であり、資料・キャプション班13名、展示班7名、デザイン班7名とし、それぞれの班に班長1名を置いた。以下、上記3班を「基礎班」とする。加えて全体の進行・指示や資料館職員と教員との連絡を代表して行うリーダー1名とサブリーダー1名を基礎班と兼任する形で置いた。10月からはミュージアムツアーを担当する実習生を5班に振り分け、各個人の所属する基礎班と兼任する形で構成した(表1)。

(2) 学生企画展のテーマとコンセプトの決定に至るまで

学生企画展では、金沢大学資料館の所蔵資料を用いた展示を行うこととなっており、4月から5月にかけて各個人が資料館のVirtual Museum Projectや学術資料データベースに掲載されている所蔵資料を基に企画を作成した。これらを持ち寄り、それぞれが所属する基礎班内で話し合いを行った後、班ごとに企画案を一つにまとめた。資料・キャプション班は人数が多いため、2班に分かれて作業を行った。各班の企画は博物館実習の時間内で、実習生全体に向けてコンペを行い、令和3年度学生企画展のテーマ選定を行なった。このコンペでは、資料・キャプション班から教育関係資料を主軸とした「かわいいeducation!」、展示班からコミュニケーションの方法の変遷に焦点を当てた「避密の話—学生たちの対話の歴史—」、デザイン班から海外旅行や国際交流についての資料を中心とした「Golden Journey」などのテーマが提示された。これらのコンペに提示されたテーマのうち、資料・キャプション班からもう一つ提示された、「光」を多角的な視点で紹介する「光をシコウする」に多数決を経て決定した。展示班、デザイン班のテーマにも共通しているが、新型コロナウイルスの流行の真っ只中であった事もあり、コロナ禍での人々の生活や心象に焦点を当てた展示を提案する学生が多くいたことが特徴的であった。これらの関心も踏まえつつ、個人の心の中の「光」についても触れる展示を行うこととなった。

(3) 各班の準備活動及び企画展の成果

今回の博物館実習履修生は27名と比較的人数が多く、コロナ対策も並行して行わなければならないため、作業は各班に分かれて行った(表2)。また、Zoomを用いた対面と遠隔併用型の進行も行った。各班の作業の進捗については、各授業の冒頭と最後に報告時間を設け、それぞれの班の活動内容を共有した。加えて、実習授業外の連絡についてはLINEを利用した連絡や、Webクラウド・サービスを使用した資料等の情報共有とデータ管理を行い、円滑な進行を試みた。そのほか、特別に連携が必要な場合は、各班の判断で共同の会議を設け、話し合いを行った。

展示の進行計画については、全体のリーダー・サブリーダーと各班班長を含めた5人で随時リーダー会を開催し、今後のスケジュールについて話し合い、それらをLINEや授業時間を通して全体と共有した。

タイトル・テーマを決定した後、前期の期間では資料・キャプション班は展示資料の暫定リストを作成し、資料の詳細な調査を行った。収蔵庫で実際に資料を確認した後、資料展示の選定、目玉となる展示資料の決定、追加資料の検討を経て10月に最終的な展示リストを決定した。この間にキャプション内容の作成、解説パネル内容の作成を同時進行で行った。同じく、デザイン班は5月からビジュアルイメージの決定及びポスター・チラシの作成に取り掛かり、11月1日に入稿した。展示班は展示計画の作成を進め、什器サイズ計測や資料の状況確認、光源・設計位置確認、天井の高さや柱の太さの計測を行い、資料館職員からのアドバイスをを受けて10月28日に展示の配置案を最終決定した。

後期からは展示の際のパネルやキャプションなどを中心とする制作物が順次作成され、11月8日～11月12日の展示作業を経て、2021年11月19日の開催を無事に迎えた。また、ミュージアムツアーの準備を展示作業と並行して進めた。

企画展開催以降は主に、ミュージアムツアーの準備を行った。ミュージアムツアーは12月13日～12月17日の5日間を通して行い、それぞれが企画展を違う視点で紹介した。2022年1月に展覧会を終え、最終報告書の作成を行った。展示の撤収作業は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止

の観点から、担当教員及び資料館職員が行った。

表1. 班割と学生の内訳

班	学類・専攻	学年	役職
資料・キャプション	人文	4年	班長
	人文	4年	全体サブリーダー
	人文	4年	
	人文	4年	
	人文	4年	
	人文	4年	
	人文	4年	
	人文	4年	
	人文	4年	
	人文	4年	
	人文	3年	
	地域創造	4年	
	展示	自然科学研究科 自然システム学専攻	1年
自然科学研究科 自然システム学専攻		2年	
国際		4年	
人文		4年	
人文		4年	
人文		4年	
人文		3年	
デザイン	人文	4年	班長
	人文	4年	全体リーダー
	人文	4年	
	人文	4年	
	人文	4年	
	人文	3年	
	人文	3年	

学生による企画展の報告「光をシコウする」

表2. 各基礎班の活動日程

月	日付	資料キャプション班	デザイン班	展示班	リーダー班	
4	8	各種役職決め				
	15	企画展テーマについての話し合い			第1回リーダー会（今後の方針の検討）	
	22	バックヤード見学 企画展テーマについての話し合い				
	29	企画展テーマについての話し合い				
5	6	企画展テーマについての話し合い				
	13	【リモート】企画案発表				
	20	【リモート】実習生全体でコンセプト検討と資料収集			第2回リーダー会（前期予定調整）	
	27	【リモート】実習生全体でコンセプト検討と資料収集				
6	3	【3日のみリモート】実習生全体で『展示資料候補一覧』作成：各章へ資料分配、章立て 検討				
	10	全体のコンセプト検討				
	17	章ごとの担当者配分				
	24	資料調査開始『資料調査リスト』作成、随時更新（～9/17：9回調査） 候補資料をもとに『出品資料リスト』作成、随時更新	各自作成したポスター案の共有 Illustratorの使い方の確認 キャプション・パネルのひな形確認	什器測定+リスト作成 計画すべき事柄の確認		
7	1	実技実習 各章ごとに資料調査と選定、 章コンセプトの検討 全体のコンセプト検討	チラシ裏面の内容について話し合い	実技実習 資料調査付き添い 展示計画案作成（展示空間 順路他、資料未確定でも可能なもの）		
	8		ポスター表面のデザイン話し合い（2案の折衷案に決定）			
	15		ポスター両面のおおまかなデザインの決定	展示室測定+図面作成 モニター、iPad使用可能台数確認		
	22					
	23		コンセプト確定、各章ハイライト候補資料の仮キャプション作成	ポスター表面の配色、フォント、チラシ裏の文章を考える		
	29		実技実習 各章ごとに資料調査と選定、 章コンセプトの検討 全体のコンセプト検討	ポスターに使用する資料の撮影		第3回リーダー会（各班の進捗状況の確認）
8	5	実習生全体でコンセプトの確認 先生と実習生全体で、仮キャプションの添削				
	12	展示班に『出展資料リスト』の共有 デザイン班にチラシ裏面記載事項の共有（章説明・資料説明のみ）		資料キャプション班より『出展資料リスト』の共有		

月	日付	資料キャプション班	デザイン班	展示班	リーダー班	
8	23	小キャプションの英訳開始	チラシ表裏仮完成、修正を重ねる ポスターに使用する資料の撮影② 各自パネルデザイン案作成 企画展開始までの作業分担 チラシ完成			
	3	各資料のキャプション・パネル作成開始 『表記一覧』作成、随時更新		展示計画作成（資料と什器 組み合わせ+什器配置）		
					第4回リーダー会（夏季休業中の作業進捗について）	
	7	『出展資料リスト』を資料館と教員へ提出 小キャプション第一稿（教員の確認）(9/14レスポンス) 『表記一覧』確認のため教員へ提出				
	9	資キャブ班 展示班合同会議		資キャブ班 展示班合同会議		
	~14			各自計画案の改良		
	17			展示室の使用可能コンセント位置、数の確認		
	9	22		校正に関する打ち合わせ（教員・資キャブ・校正係）		
	24			各自改良案共有 計画方針の最終確認（ボード数、順路の形他）		
	27			展示計画案統合 リーダー班への共有と内容確認		
	28	小キャプション第二稿（教員の確認）(10/4レスポンス) キャプション第一稿（教員の確認）(10/4レスポンス) パネル第一稿（教員の確認）(10/4～校閲完了次第順次レスポンス)		チラシ表裏仮完成、修正を重ねる ポスターに使用する資料の撮影② 各自パネルデザイン案作成 企画展開始までの作業分担 チラシ完成		
	30	デザイン班に「図解絵コンテ」の共有				
	10	7		*デザイン班共同で校正作業（⇔教員） 基本は授業日に修正作業と教員への確認作業	キャプション作成開始、校正ごとに随時修正 章導入パネル仮完成 バナー案作成	
14		キャプション第一稿提出				
18		キャプション作成・修正 パネル作成・修正	順路テープ及びソーシャル ディスタンスマーカーのデザイン決定 展示計画統合案を先生へ提出			
21		キャプション第二稿提出				
25			展示計画改良案作成 提出			
28		キャプション修正・改訂版 パネル修正・改訂版	最終展示計画案完成			

学生による企画展の報告「光をシコウする」

月	日付	資料キャプション班	デザイン班	展示班	リーダー班
11	1		チラシデータ最終確認版を資料館に送信		企画書提出
	2		キャプション原稿最終版		
	4	*デザイン班共同で校正作業 (≒資料館職員) 教員の添削が終了したキャプションパネルから順次、資料館へ校正提出	順路テープ作成 (デザイン班に依頼)	資料館にて什器等最終確認	
	5		パネル修正 パネル印刷		
	8		チラシ発送作業		
	9		貼り作業 パネル印刷作業 パネルキャプション修正	展示作業	
	10		貼り作業		
	11	ミュージアムツアーメンバーと各班のテーマの決定 シナリオの作成開始、資料調査・解説パネルとキャプションの作成・チラシ作成・展示作業中のエピソード収集			
	15	企画展開幕			
	18	資料館での全体的な流れの確認 (※集合写真の撮影) シナリオの作成、完成したグループから各自読み合わせ ビデオ撮影を行う人の決定 説明に用いる画像資料の作成 (ラミネーターを使用する)			
	12	2	シナリオの作成締め切り		
9		資料館でのリハーサル			
13		ツアー本番 動画用のビデオ撮影			
14		ツアー本番 動画用のビデオ撮影			
15		ツアー本番 動画用のビデオ撮影			
16		ツアー本番 動画用のビデオ撮影			
17		ツアー本番 動画用のビデオ撮影			
27					博物館だよりの原稿提出
~28	撮影した動画の編集				

(4) 評価

学生企画展の流れの評価として、計画・進行、情報共有、記録関連の観点から述べていく。

前年度に引き続き、新型コロナウイルスの影響下での授業進行となった。しかし、前年度とは異なり、新学期開始時の4月から学生企画展開催に向けて動き出すことができた事もあり、前々年度開催の「いろは」のスケジュールを参考にしながら、適宜前年度のようにオンラインでの進行も行った。これらの事情から、今回の学生企画展はコロナ禍での一からの企画、開催を行う前例のない試みとなった。そのため実習生や、各班リーダーはいつオンライン授業になるのか、どこまでの教育普及活動が実施可能かなど、さまざまな懸念事項をキックオフの段階で共有し、柔軟に対応できるようなスケジュールを設定した。また、今回の企画展のテーマとして「光」を取り上げた事もあり、「光」をどのように捉えるのか、という点について綿密な協議を実習生全体で行い、コンセプトの

選定を行った。このことで、展示の基盤が固まった一方、話し合いが間延びし、実習生によって話し合いへの意欲にばらつきが出てしまったことが反省点として挙げられる。また、人数が多い事もあり、各班や班の中にも作業量に差が出てしまっていた。企画展を開催するにあたり必要となる作業を企画開始時点で把握し、流動的に作業が均等になるような工夫が必要だと考える。

情報共有については、実習授業内外において、LINEを用いた連絡が作業を円滑に進める上で重要な役割を果たした。特に夏季休業期間中など、対面で会うことが難しい場合はZoomを利用し、それぞれの班の作業を進めることができた。各班の作業の進捗は授業後に議事録をとるほか、夏季休業中に対面でリーダー会を開き、夏季休業中の各班の様子や進行具合をリーダー・班長同士で確認する機会を設けた。リーダー・班長同士の連携を多く行っていた反面、実習生全体の情報共有や、共通の意識づけは不十分な部分もあった。全体での大まかな企画展の流れの中で、作業の疎密が発生することがわかった時点で、それらを全体で共有し、適宜補い合える体制づくりが重要である。

(多田)

3. 資料調査と展示資料の選定について

本章では、企画展の資料概要を述べた後、資料調査と展示資料選定に関して詳述する。

(1) 展示資料の概観

本企画展では金沢大学資料館、金沢大学附属図書館が所蔵する資料について、光を扱う実験機器から文学・芸術作品に表出する「光」まで、光に関連するものを扱っている。展示の対象は、金沢大学をはじめ旧制第四高等学校（通称：四高^{しこう}）にゆかりのある資料である。より多くの学生に向けた展示企画を目指し、文理の枠を超えて光の様々な側面を理解できるよう、所蔵資料を確認しながら章立てを行った。これを受けて、主な展示資料としては物理実験機器、カメラ、西村コレクション¹⁰のランプ、江戸時代の図絵をはじめ美術工芸品を選定した他、モチーフとしての光についても提示できる文芸作品などの資料を選別した。

(2) 展示資料選定・資料調査

今回の企画展では、コンセプトの決定と並行する形で資料の選定を進めた。資料を調べる際に用いたのは、資料館のVirtual Museum Project¹¹と学術資料データベース¹²である。加えて『金沢大学五十年史通史編』¹³等も参考とした。展示全体を3章構成にする案は4月のコンペ段階で提示され、コンセプトを決めていく中でより詳しく、展示品やその展示方法に合わせる形で決まっていた。展示品は1章が実験機器、2章がカメラやランプ、3章が文学や美術工芸作品という大枠が決まり、6月上旬に博物館実習展示品候補一覧を作成した。展示品の候補を確認する資料調査に向け、資料・キャプション班では他班にも共有しながら、調査の日程や担当者を決めた。この資料調査にあたっては、資料の状態を確認し展示の可否を判断する必要があることがあった。章立てや展示内容に影響する場合もあり、特に資料の状態を確認する必要があるものから先に調査を行った。他の基礎班のメンバーも参加し、基本情報（名称・資料番号・年代・寸法など）を確認した。こうして、学生企画展「光をシコウする」の暫定資料の選定を進めた。資料調査をしてきたものについては、Googleドライブに資料調査のフォルダを設け、写真を掲載することで実習生全体に共有した。また資料の選定を進める上で展示スペースも考慮し、1～3章の展示資料がそれぞれ10点前後になるように候補を絞

り込んだ。

資料調査は6月17日から始めて計9回行っている。資料館の収蔵庫で絞り込んだ資料を確認し、当該資料が展示に向いているか検討した。第1回の調査では、「ブンゼン氏分光器」は非常に重く、持ち運びが困難である点、「木造地藏菩薩立像」は展示スペースを取ってしまう可能性がある点などから、候補から外している。第2回では「カメラ本体」や「万花鏡」、「幻燈映画 絵9枚」の実物を確認しながら、展示方法を併せて検討している。第3回に「レーネンベルク氏偏光器」、第4回に「レイノルズ社化学掛図」を調査し、それぞれの状態が展示に不向きである点から、展示候補からは外している。第4回の時点で7月19日となっており、第5回以降は夏季休業期間に行っている。こうした資料調査を通して、写真では分からない資料のサイズや詳細な状態などを確認でき、資料リストの再編を進めることができた。

章構成は展示を企画する中で、比較的多くの時間を割いて検討した。資料の選定に関わる内容であるため、ここで記しておきたい。章構成として1章は光の科学的な性質で決まっていたのだが、2章以降の内容は展示品のストーリー立てに苦労した。2章は科学によって理解された光の利用、3章は文学や絵画に表現された光とし、1章から3章への橋渡しをする役目を2章が担う。資料選定の段階で、3章では光に表現された人の心・内面を示すことを目指し、専ら文学作品や美術工芸品を探した。しかし、展示候補の中で実際に人の心について裏付け可能な資料は無いに等しく、客観的に解説することは困難であるという結論に達した。このため、あくまで制作物に表現された内容を重視し、その内容が『日記』などから裏付け可能なものを示すことになった。こうした経緯を経て、3章では文学作品として室生犀星直筆の「金沢大学校歌原本」などを扱った。上記の経緯を経て、10月に展示資料の最終的な資料リストが完成した(表3)。この間、資料選定に加え、光の性質や実験機器の使い方についても調査を行った。こうした調査を経て、キャプションやパネルの作成を行った。パネル作成に関する詳細は第5章「展示に関する制作物について」の第2節「パネルの構成と作成」に譲る。

表3. 展示資料リスト¹⁴

番号	資料名	請求番号	寸法(幅×奥行×高さ cm)	所蔵場所
	①試行			
1	キルヒホフ・ブンゼン氏分光器	420-01-002-22	プリズム室径8.5、集光鏡筒17、接眼鏡筒17、マイクロメーター鏡筒8.5×25(高)	金沢大学資料館
2	ネーレンベルグ氏偏光器	420-01-002-32	17×7.5×53	金沢大学資料館
3	偏光色実験用結晶板	420-01-002-221	35.95×14.4×4.9(箱を閉じた状態)	金沢大学資料館
4	三稜柱硝子	420-01-002-232	三稜柱一辺長7.4×幅3、スタンド高24、台座径9.7	金沢大学資料館
5	リフラクトメーター	420-01-002-37	目盛板径16、長13.5	金沢大学資料館
6	大凹レンズ	420-01-002-237	台座21、高37.7、鏡径11.325	金沢大学資料館
7	大凸レンズ	420-01-002-238	台座21.1、高38.1、鏡径11.2	金沢大学資料館
	「試行」資料小計 7点			

番号	資料名	請求番号	寸法 (幅×奥行×高さ cm)	所蔵場所
	②志向			
1	カメラ本体	分類740 番号1	縦8、横12、奥行4.5、レンズ口径2.5	金沢大学 資料館
2	アインシュタインの写真 (データの二次利用)	—		金沢大学 資料館
3	乾板	分類740 番号2	縦13、横18	金沢大学 資料館
4	三脚	分類740 番号3	長37cm (足を開いた状態)	金沢大学 資料館
5	幻燈映画 絵9枚	420-01- 002-240	8.25×9.95cm、厚0.4cm	金沢大学 資料館
6	万花鏡	420-01- 002-231	長21.9cm、径4.245cm	金沢大学 資料館
7	舳倉島ノ龍ヶ池 遠景ハ建築中ノ 燈台	分類740 番号2	縦32cm、横39cm、厚3cm	金沢大学 資料館
8	ランプ (西村コレクション): 青銅ランプ	750-00- 007-58	縦11.5cm×幅5cm×高さ3.8cm	金沢大学 資料館
9	ランプ (西村コレクション): 96JN11	750-00- 007-6	本体:縦7.6cm×幅6.4cm×高さ2.6cm、 灯芯口径:1.6cm	金沢大学 資料館
10	ランプ (西村コレクション): 96JN48	750-00- 007-39	本体:縦8.5cm×幅5.1cm×高さ3.8cm、 灯芯口径:0.9cm	金沢大学 資料館
	「志向」資料小計 10点			
	③思考			
1	儀式風俗図会 乾	分類60 番号452	見開き: 縦27.7cm×横46.1cm	金沢大学 附属図書館
2	加賀藩年中行事図会 七夕 (のコピーを貼り付けたパネル)	分類60 番号451	見開き: 縦24.2cm×横35.6cm	金沢大学 附属図書館
3	『水彩による原寸大模写「聖フラン チェスコ」(イタリア フィレン ツェ サンタクロチェ教会大礼拝 堂 アーチ右壁面「フランチェスコ の聖痕拝受」』	720-09- 014-00037	(縦59.5cm×横42cm)×2枚*展示は 2枚をずらして並べて置く(高さ差(上 部):22.5cm 高さ差(下部):22.5cm →写真参照	金沢大学 資料館
4	阿弥陀如来像石板 (一乗谷朝倉 氏遺跡出土)	210-00-6- 183	縦55cm×横50cm×高さ12.5cm	金沢大学 資料館
5	金沢大学校歌原本	番号無し/ 資料名のみ	(縦30cm×横19.5cm)×3枚	金沢大学 資料館
6	学帽	000-01- 100-0127	縦26cm×横20cm	金沢大学 資料館
7	手ぬぐい	31	縦94cm×横36cm	金沢大学 資料館
	「思考」資料小計 7点			
	資料総計: 24点			

(3) 評価

展示資料の候補は資料調査がある程度進んだ段階で展示を断念するものがあった。初めに展示候補を多く挙げておき、新たな候補を考えながら進めることで、途中で行き詰ることが無いよう工夫

した。一方で、文学作品や図画等は資料の性格上調査の進捗に差が生まれることがあり、班内での役割分担は柔軟に対応していく必要があると考える。

展示資料の選定においては、展示可能か疑問に思う資料があった。夏季休業前に、各章1つずつ仮キャプションを作成し、実習生全体で添削作業をすることで、選定基準を見直すことができた。加えて、展示を通して伝えたいことや展示全体の流れなどを、頻繁にZoomを活用し話し合ったことで、慎重に選定作業を進めることができた。一方で、話し合いに参加できる班員が限られる場合もあり、班内でも展示資料に関する認識に差が生まれることがあった。こうした認識の差を埋めるために、授業の時間で議題を決めて計画的に準備を進めることが重要であると考えた。

資料調査は夏季休業前に計画を立て、調査を終えてキャプション作成に切り替える期限を設けた。資料調査に参加できる人数には限りがあるため、調査の際に作成した調査リストや調査結果はExcelを活用し班員や他班のメンバーに共有した。調査では、実物写真を撮ること、実寸測定、用途の理解・展示における注意点などの確認をした。これらの情報は逐一展示班に共有することで、後の展示作業がスムーズに進んだ。一方で、キャプションやパネルの製作にあたり、デザイン班への共有が不十分であったところもあった。資料調査を進めるなかで展示品やその展示方法に関する情報が増えていくため、授業の最後に他班に情報を共有していくことで、お互いに認識の齟齬が生まれないように工夫が必要であると感じた。

(椿野)

4. 展示室の構成と設営について

本章では、展示室の構成と設営について述べる。展示室の構成を決定するまでに、展示空間及び什器サイズの測定、展示案のブレーンストーミング、資料・キャプション班との意見共有、展示案の統合及び修正といった展示計画を行い、2021年11月8日より、パネル・キャプションの印刷、什器の設置、配線確認、展示資料及び備品の搬入・設置・調整、パネルの設置、ライティングの調整、iPadの動作確認、フロアマーカ―設置、全体の微調整の手順で展示作業を行った。詳細な展示作業については本章の設営の節にて述べることとする。

(1) 展示室の構成内容

展示室は時計回り一方通行の順路とし、常設展と企画展の接続がスムーズになるよう心掛けた。展示室内は1章「試行」、2章「志向」、3章「思考」の3つの空間から構成され、人間が光を知り、どのように理解しようとしたのか、その光をどのようにして日常に取り込まれてきたのか、そして、光をどのように考えたのか、先人たちの体験を追体験してもらえるような順路案を検討した。資料だけでなく、展示空間自体にも光を意識してもらえるよう、パーテーションの数を最小限に抑えたり、緩急のあるライティングを設置したりするよう心掛けた。順路とソーシャル・ディスタンスを示すフロアマーカ―も足形と光をイメージしたデザインにすることで、来館者一人一人が、光に対して歩みを進めていくというイメージを込めた。

目玉資料となる「キルヒホフ・ブンゼン氏分光器」と「三稜柱硝子」は高足の什器に設置し、順路の初めに設置した。光という題材は、難しいというイメージを彷彿させるが、視覚的にも美しく、不思議な形の資料を初めに設置することで、企画展に対する興味を引き出すことを狙いとした。

1章「試行」では光が持つ物理学的特徴を観測するために使われた物理実験器具の展示が中心と

なった。光が持つ様々な特徴を一目で感じてもらえるよう、「三稜柱硝子」による光の分散が見えるような展示や、「大凸レンズ」や「小凸レンズ」を通過した光が壁に投射されるようなライティング配置を心掛けた。また、専門的な用語の多い光について、理解を深めてもらうため資料・キャプション班が作成した実験動画をiPadを用いて放映することで、来館者に光が持つ物理学的特徴の一端を理解してもらおうと試みた。1章の展示は、金属製やガラス製の資料が多く、比較的明るめのライティング設定とし、身の回りにある光の存在の主張を強めた。

2章「志向」では人々が光を生活に取り入れたことを象徴する資料の展示を行った。展示資料は「カメラ」や「台ランプ」といったモノ資料から、「舳倉島ノ龍ヶ池 遠景ハ建築中ノ燈台」や「アインシュタインの写真 (パネル)」のような平面の写真資料、iPadなど、多様な資料形態であり、資料の劣化を防ぐためにライティングは暗めに設定した。また、「幻燈映画」と「万華鏡」は、LEDにより常時ライトアップする展示方法は採らず、光らせた状態で撮影した動画をiPadで流した。

3章「思考」では祈りや希望などを託された光が表現されている資料の展示を行った。この章で扱った資料は、宗教や儀式に取り入れられた光に関する資料と、第四高等学校時代の学生に関する資料の大きく2つに分けられた。本章の資料は「水彩による原寸大模写『聖フランチェスコ』(イタリア フィレンツェ サンタクローチェ教会大礼拝堂 アーチ右壁面「フランチェスコの聖痕拝受）」、「阿弥陀如来像石板 (一乗谷朝倉氏遺跡出土)」といったサイズの大きい資料や、「儀式風俗 図会 七夕：乞巧奠」、「金沢大学校歌原本」といった紙資料、「第四高等学校の学帽」、「手ぬぐい」のような布の資料等の多様な資料から構成されており、展示方法や使用する什器の選定に苦労した。また、本章は展示計画の段階から資料の種類や展示順などの変動が多かったため、資料・キャプション班との定期的な情報共有を行い、慎重な展示計画を心掛けた。本章は紙資料等の劣化を防ぐため暗めのライティング設定がなされたが、最後にあたる出口には資料を置かずライティング設定を最も明るく設定することで明るさに緩急をつけた。これは自らの身の回りにあふれている光へと注意を向けるきっかけを作り、自分にとって光とはどんなものなのか考えてもらいたいという気持ちりが込められている。

(2) 展示室の設営

展示室の設営は11月8日～11月12日の5日間をかけて行った。設営作業は主に2～4限の時間帯に行い、約10人程度を目安にシフトを組んで作業を行った。そのうち、展示室における設営作業は展示班と資料・キャプション班が中心となり、並行して、デザイン班と資料・キャプション班がパネルの印刷、作成作業を中心に進めた。この際、設営現場には展示計画を行った展示班が1人は配属されるようにして、展示の指示、確認作業を担った。

展示作業は、展示班の作成した展示計画図(図1)を基に行ったが、実際に什器を配置していく内に気づいた改善点はその場で取り入れ、計画に縛られすぎないよう柔軟な対応を心掛けた。例えば展示資料の高さを実際に見て什器の入れ替え等を行い、微調整を行った。作業の最後に、展示空間を自ら見回ったり、順路に沿って動画撮影を行ったりして、来館者視点で順路に不備はないか確認を行った。ライティング設置は、すべての資料の配置が終わった後に行った。ライトを渡す人、ライトを設置する人、ライトの当たり具合を確認する人を分担し、最適なライティング設定が円滑にできるよう工夫した。

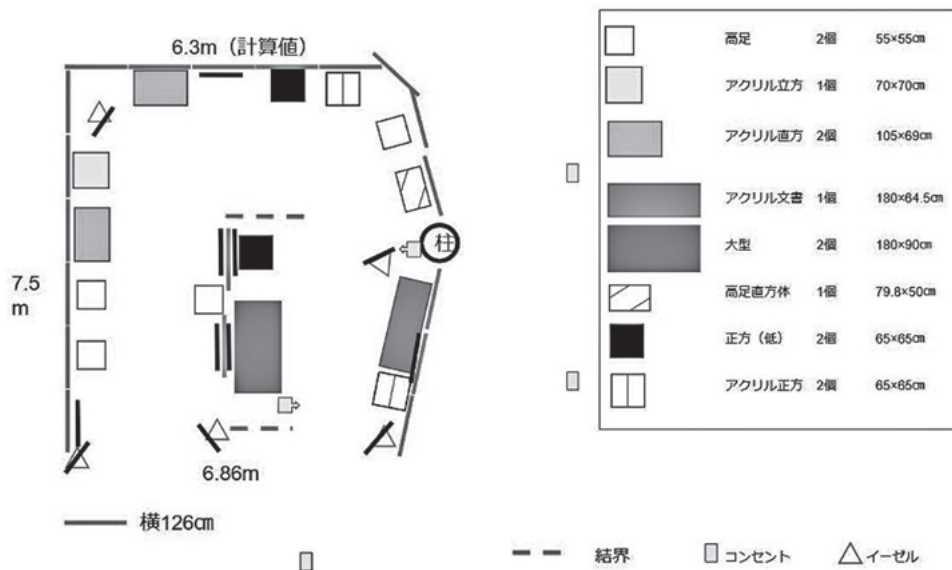


図1. 展示の構成

(3) 評価

展示計画の作成にあたってまず必要となることとして、展示空間及び什器の測定が挙げられた。展示空間の測定はパネルサイズをしっかりと測っておくことで大方の計画を立てることはできたが、空間内にある柱や角に設置されているボードの測定等も十分に行うべきであると感じた。今回は角のボード角度や円柱の位置関係を正確に測定することが難しく、円柱の外周の長さやはみ出しているボードの長さから、図面上で展示空間を近似して展示計画を行った。正確な測定が難しい場合、実際よりも少し狭いことを想定して展示計画を行うことで、展示作業の際に順路が圧迫されるといった問題を回避することができると思われる。

什器はただサイズを知っておくだけでなく、どの什器がどのような種類なのかを目視でも紐づけておく必要があった。特に展示班は什器の種類を把握していなければ展示作業の際に指示が困難になることが危惧された。今回は展示作業に入る前に、班員全員で什器の種類を再確認した。また、可能であれば什器と呼び名を明確に区別しておき、指示の際にも混乱が起らないように留意できればより円滑な作業ができたと思われる。

展示空間や什器の測定は資料館との綿密な連携が必要とされた。今回は展示空間の測定と資料館の燻蒸作業の日程が重なってしまったことがあった。測定や資料館との確認作業を行う場合は、事前に余裕を持った連絡を行うことでスムーズな作業が可能になると考えられる。

展示計画は展示班メンバー全員が1案ずつ考えた。これは各班員が考えている展示の工夫をブレンストーミングしてもらったためであった。この方法を取り入れたことで、班員がこの企画展にどのようなイメージを持っていて、どのような工夫の仕方があるのか共有することができ、意見の統合の際に食い違いが起ることを防ぐことができた。

各展示案を1つに統合する際、Zoomを用いて展示班及び資料・キャプション班と意見共有を行った。これにより、企画展のメッセージ性を再確認するとともに、具体的な順路や展示計画が飛躍的に進んだため、班ごとの定期的な意見共有は円滑な計画作成に重要だと感じた。

展示作業の際、細かな役割分担や、1日おきの情報共有を行ったことは円滑な展示作業の実現に役立った。また、展示計画図を印刷し、展示空間内に掲示しておくことで、作業を行う実習生全員が完成系のイメージを持てるようにしたことで予定よりもかなり早く展示作業を進めることができた。

展示作業の中で、「金沢大学校歌原本」が什器に入らないというアクシデントが起こった。什器の内寸データや資料データ、そしてキャプションサイズの把握が不十分であったことで生じたミスだと考えられる。今回の場合、資料館が所有しているアクリル製の台を用いて資料の1つを持ち上げることで立体的に什器内の空間を確保し、対応することができた。また、資料の下に敷く布は資料の見やすさや雰囲気に影響を与えるため、展示計画の際、資料館が所有する備品の把握をしておくことで、展示の際のアクシデントや、展示の雰囲気を変えるといったことに対応することが可能となると考えられる。不測の事態や展示の幅を引き出すためにも、什器のみならず、展示に用いることができる備品の確認をしておくことが推奨される。

(中神)

5. 展示に関する制作物について

本章では企画展に関連する制作物について述べる。本企画展での制作物は主に展示資料の基礎的な情報及び資料解説を記すキャプション、企画展の趣旨や各章の趣旨、光の原理や利用、表現についての解説を提示するパネル、企画展の広報としてのポスター・チラシとなっている。加えて第4節「その他制作物」において、以上に挙げた制作物以外についても触れることとする。

(1) キャプションの構成と作成

キャプションは、上記の通り展示資料の基礎的な情報及び資料解説を示す目的のために作成した。1つの展示資料につき1つのキャプションを作成することとし、最終的に計25点のキャプションを作成した。キャプションに記載する内容としては、原則として資料番号、資料名（日本語/英語）、年代、制作地、所蔵場所、解説文を記し、資料名と年代及び所蔵館名は日本語と英語を併記した。

資料・キャプション班が調査した資料の情報と資料館・図書館のデータベースを基に、作品ごとのキャプションを執筆し、デザイン班及び資料館職員と教員が校正を行った。また、それらの連絡や校正作業を基礎班とは別の「校正係」を組織し行った。キャプションのデザイン・図解の作成はデザイン班が行なった。

(2) パネルの構成と作成

パネルの種類は大きく分けて「挨拶パネル」、「章立てパネル」、「解説パネル」の3種類に分けられる。挨拶パネルは「実習生・館長あいさつ」、「はじめに・注意事項」、「おわりに」の計3枚（A0/A1）、章立てパネル（図2）は「第1章試行」、「第2章志向」、「第3章思考」の計3枚（A1）、解説パネル（図3）は「光の物理的理解」「古谷健太郎のカメラとアインシュタイン博士」「伝統行事と光—先人たちの7月7日—」「宗教美術と光—光背—」「文学者と光—室生犀星の志—」の計5枚で構成した。

「挨拶パネル」の作成について、「実習生・館長あいさつ」はリーダーを中心とした、各基礎班から1名ずつのグループで行った。「はじめに・注意事項」・「おわりに」も同様に、それぞれの基礎班

から1名ずつのグループで協力して作成した。「章立てパネル」は資料・キャプション班が執筆し、校正係及び資料館職員と教員が校正を行った。

(3) ポスター・チラシの構成と作成

企画展の広報の印刷物としてポスター・チラシの2種類を作成した。ポスター（A2、縦、カラー）は片面とし、タイトル、資料写真、場所、開催期間、休館日、協力機関、金沢大学ロゴで構成した。（図4）。チラシは両面とし、チラシ表（A4、縦、カラー）はポスターと同じ内容とデザインを採用した。チラシ裏（A4、縦、カラー）は企画展紹介、資料写真と紹介、アクセスマップ、ミュージアムツアーについての情報で構成した（図5）。

ポスター・チラシの作成にあたり、作成する準備として、デザイン班に所属する実習生自身の「光」のイメージをそれぞれがイラストや図形で表現した。それらをもとに実習生が一人1～2案のデザインを作成した。これらのデザイン案を実習生全体に共有し、コンペを行った。コンペを経て決定したポスター案をAdobe Illustratorで作成した。これと並行してチラシの裏に入れる情報を整理し、企画展の紹介文の作成や展示タイトルのタイポグラフィ作成、写真撮影などを行なった。

資料の説明文は資料・キャプション班が執筆し、デザイン班が文字数や体裁を整えた。資料写真は資料館地下準備室にて撮影し、Adobe Photoshopで加工・トリミングを行った。これらの工程を終え、入稿した。入稿後、ポスターは50部発注し、学内等に掲示するとともに、学外へ25部送付した。チラシ500部を発注し、学内等に掲載・配付するとともに、学外へ250部送付した。

(4) その他制作物

その他の展示に関する制作物として、告知メール、資料館Webサイト用バナー及び資料館Webサイト用告知文、展示用動線用フロアマーカー、企画書の作成を挙げる。

告知メールは、金沢大学の学内メールであるアカンサスメールから学内に向けて送付する告知メールを指す。このアカンサスメールを通して、企画展開催に関する告知メール、ミュージアムツアーの告知メールを準備・送付した。企画展開催告知メールにはチラシ（PDF）を添付し、ミュージアムツアーの告知メールでは各回の開催日時とタイトルを掲示した。

資料館HP用の告知バナーについては、展示タイトルと目玉資料の写真で構成した（図6）。デザインは、ポスターのデザインと統一感が出るよう調整し作成した。資料館Webサイト用告知文は、チラシやパネルの文章を参考に200字程度で作成した。作成はデザイン班が担当し、前者についてはAdobe Illustratorを用いて作成した。これら2点を揃えて、データを資料館へ提出した。そのほか、展示室内に設置する展示動線を記すフロアマーカーのデザインなどは、展示班との協議の上、「光」をイメージした菱形で統一し作成した。

企画書は、主にリーダー班が作成し、実習生全体で校正を行なった後、11日1日に提出した。企画書には、会期、時間、展示場所、主催、協力機関、企画名称、展示コンセプトを記載するとともに、展示資料リストと展示レイアウト図を添付した。



図2. 章立てパネル



図3. 解説パネル



図4. ポスター・チラシの表面



図5. チラシの裏面



図6. 資料館HP用バナー

(5) 評価

ポスター、チラシデザインについては、「光」という形のない現象を取り扱うが故に、実習生それぞれに「光」のイメージが異なり、チラシデザイン案にもばらつきが出た。これらのうち一つを選ぶとなると甲乙つけ難いことから、それぞれのデザイン案を実習生全体と共有し、多数決で決定する方法をとった。これによって抽象的な「光」がポスターデザインに選ばれたことから、チラシの裏面には、人工的な「光」をデザインに落とし込み、チラシの裏表で光の多様性を表現することができた。これらの作業については前期のうちに、大方のレイアウトなどは完了していたため、余裕を持った作業を行うことができた。デザイン班の作業のうち、展示に用いる制作物については、データの管理が重要となる。パネルの原稿や、解説図など構成や修正を繰り返す中で、どのデータが最新のものなのかが曖昧になる可能性がある。データを更新する時のルールを決め、全体と共有し正確に制作物を提出できるような仕組みを作ることが必要であると考えた。

(多田)

6. 教育普及活動等の実施について

例年の博物館実習では教育普及活動としてミュージアムツアーとワークショップを実施していたが、今年度は前年度に引き続き新型コロナウイルス感染症予防のため、ワークショップの実施を見送った。従って本章では、教育普及活動として実施したミュージアムツアーとその動画の作成・公開について述べることとする。

(1) ミュージアムツアーの実施

ミュージアムツアーは2021年12月13日~17日の5日間で行い、実施時間は原則12時15分~12時30分の15分間とした(5分間の質疑応答を含む)。来館者に展示資料や資料に関連する人物への興味を持ってもらえるように、月曜日は「光の展示を企画する~私たちのシコウ~」、火曜日は「光を求めた三偉人」、水曜日は「光を志向する~身近になった光の技術~」、木曜日は「先人たちにとっての光、私たちにとっての光」、金曜日は「展示だけじゃない!企画展に溢れる様々な光」と、実施日ごとに多様な展示資料及び人物に焦点を当てた(表4)。

ミュージアムツアーでは班の編成を改めた。班員の構成として、資料・キャプション班が各班2~3名、デザイン班・展示班が各班1~2名となるように構成した。日程は前年度の事例を参考に

12月中旬の昼休みとし、教員や資料館職員に承認を得た。5日間で均等に展示資料全体を解説できるよう、今年度は全体の趣旨説明と1～3章で曜日ごとに担当を割り振った。内容としては、資料自体の概説に加え、キャプションに載っていない情報（資料・人物調査の過程で知った逸話、展示作業中の工夫や苦労話など）を盛り込んで解説した。加えて、各回では、クイズを出題するといった来館者参加型の要素を取り入れ、2日目にはニュートンなどに扮した寸劇も行った。ツアー前週の12月9日の授業内でリハーサルを行い、シナリオの読み合わせをして教員及び資料館職員から助言を得た。本番当日には、資料館に隣接する金沢大学附属図書館の職員の許可を得て、本番実施前（12時10分頃）に館内放送でミュージアムツアー開催を告知する放送を行った。ミュージアムツアーには、5日間で計93人が参加した（図7）。



図7. ミュージアムツアー「展示だけじゃない！企画展に溢れる様々な光」の様子

表4. ミュージアムツアーのスケジュール

日程	タイトル	内容	参加人数（人）
12月13日（月）	光の展示を企画する～私たちのシコウ～	展示のテーマ、資料の選定	15
12月14日（火）	光を求めた三偉人	第1章（物理実験機器）	21
12月15日（水）	光を志向する～身近になった光の技術～	第2章（カメラ、万華鏡等）	20
12月16日（木）	先人たちにとっての光、私たちにとっての光	第3章（画像、四高資料）	19
12月17日（金）	展示だけじゃない！企画展に溢れる様々な光	展示手法	18

(2) ミュージアムツアー動画の配信

今年度は前年度に引き続き、新型コロナウイルス感染防止のため来館者が限定されることを考慮し、教育普及活動の一環としてミュージアムツアーの様子を動画として撮影し、インターネットの動画投稿サイトに配信することとした。動画の撮影は、万が一の場合に備え2名体制とし、それぞれ実習生が行った。動画を撮影する上で特に気を付けた点として、ミュージアムツアーに参加した来館者の肖像権を侵害しないよう、来館者が映らないように配慮した。また動画の編集は、班のメンバーも含め数名が文化遺産学研究室に行き、同室の動画編集ソフト Adobe Premiere Pro を用いて行った。動画編集作業の際には、班のメンバーが台本と照らし合わせて、内容に齟齬が無いように工夫した。12月中に動画を担当教員や資料館職員に共有し、確認をとった。編集したミュージアムツアー動画は、1月5日から1月12日にかけて、全5回分を動画投稿サイト YouTube にて順次公開した¹⁵。

(3) 評価

ミュージアムツアーについて、事前リハーサルを実施していたため、本番では円滑な進行ができた。ツアー終了後には参加者から積極的に質問があり、より詳しい内容を求められて答えられない場面もあったが、来場者と相互に学び合える貴重な時間となった。加えて、参加者に質問を投げかけるなど、和気あいあいとした雰囲気で行ったグループもあった。提示の方法として実際の長さを紐で示すなど、ハンズオン展示ができない状況だからこそ、視覚的な工夫が見られた。一方で、参加者がほぼ博物館実習関係者だったため、もう少し宣伝を行うべきであった。できれば、理系の学生からの参加もあればより良かったと考える。また、内容としては展示の裏話ばかりに話が集中してしまい、やや資料の解説が不足した点があった。全体の流れについてリハーサルと本番を通して、参加者全員が資料を見やすい立ち位置を考える必要を感じた。参加者を増やすためにも、また参加者の属性を知る上でも、参加者に向けたアンケートを実施するなど改善策が必要である。

ミュージアムツアー動画の編集・公開については、動画投稿サイトに全5回分の動画を公開することによって、学内外に広く本企画展への関心を喚起することができたと考える。機器トラブルによって動画撮影が途中で中断したという前年度の反省も踏まえ、リハーサル時から撮影担当者が同行し、アングルなどの話し合いを行った。一方で、動画にする上で声の大小が生じることがあり、原稿をしっかりと覚えて、参加者に届くよう注意する必要がある。加えて、動画編集作業の際に動画全体の音量が小さくなり、何度か編集作業をやり直すこともあったことから、音量を確認しながら編集作業を進めると良い。以上の反省点を踏まえ、今後の来館者参加型企画の参考になることを願う。

(椿野)

7. 学生展への大学資料館の関わり

繰り返しになるが、「光をシコウする」は金沢大学資料館における8回目の学生企画展である。「植物図「館」」(平成26年度)、「破かれた恋愛小説」(平成27年度)、「ハカリモノ」(平成28年度)、「パンカラ寮生類」(平成29年度)、「物録(モノログ)」(平成30年度)、「いろは」(令和元年度)、「写真で見る前身校 Part II」(令和2年度)といった過去の学生企画展とはまた異なる切り口で、本学学生の柔軟な発想を見事に示した展覧会となった。

本学の学生企画展は、企画立案・資料調査・原稿作成・展示陳列作業・広報等、全てにおいて博物館実習生主体であることを特徴としているが、金沢大学資料館所蔵資料を使用して展示を行う以上、多少は資料館員がサポートした部分がある。そこで以下では、今回の学生企画展への資料館の関わりについて記す。博物館実習生たちが企画展を作り上げていく中で、資料館側ではどのような動きをしていたのか、資料館所属教員の立場から述べ、その上で本稿を締めくくるとしたい。

企画立案に入る前の第1クォーター初期、資料館を主所属とする教員として松永が過去の事例を紹介しつつ、注意事項やルールを説明した。前年度は、博物館実習の前半期（第1・2クォーター）が新型コロナウイルス感染流行第2波となり登学禁止等の制限が続き、企画展について深く議論することができなかつたため、テーマや展示資料を資料館から実習生に指定せざるを得なかつた¹⁶。しかし、今回は第1クォーターが感染流行第4波に重なったとは言え、登学禁止までには至らなかつたことから、従前通りテーマから学生に決めてもらう形を取った。

第1・2クォーターの間、金沢大学の活動指針レベルが2（対面授業をする場合は、感染防止対策の上、4㎡/人程度のスペースを確保）まで引き上げられたため、密を避けて複数の教室をZoomでつなぐ形を取ることもあったが、何とか登学及び対面形式は維持し、実習生の議論の場が途切れることはなかつた。

そして、第1クォーターで今回の企画が決まった後、第2クォーターには実習生が資料の実見・撮影や什器の確認等に資料館を訪れるようになり、そのたびに資料館員が立ち会って対応した。その際、個々の資料の扱い方や、什器の特徴なども学生に教え、学芸員としての基礎知識・技能の習得に寄与するように努めた。

その後、夏になってデルタ株による感染流行第5波が訪れたが、9月には感染者数が減少傾向に転じており、金沢大学の活動指針レベルは9月末に1（感染防止対策を徹底の上、講義・演習・グループワーク・実験・実習実施可）となり、また第3クォーター開始の10月1日には資料館の学外者利用制限も解除になっていた¹⁷。そこで、今年度の学生企画展はコロナ禍前に近い形で開催することを決断し、第3クォーターは当初予定通りの開催に向けて展示準備を加速化させることになった。企画書、パネル・キャプション、展示計画、チラシ・ポスター等を、各担当実習生が順次仕上げていく過程で、資料館員は教員とともに原稿や図面を校正したり、展示計画に助言したりした。そして、11月第2週には展示陳列作業を行うこととなり、資料館員はそのサポート役にまわった。

なお、パネル・キャプションに関して、ここ数年の学生企画展では各文字原稿を夏季休業期間に教員と資料館でそれぞれチェックし、それを実習生が修正したものを10月にパネル・キャプション雛形に組み込んだ後、さらに教員と資料館で複数回チェックしていた。しかし、今回は文字原稿のチェック・修正段階で10月にかなり食い込んでいたため、従前と同じでは時間が足りないと判断し、パネル・キャプション雛形組込み前の文字原稿チェックを教員チェックの途中で止め、資料・キャプション班が書いた原稿をデザイン班がパネル・キャプションに完全に組込み終えてから教員・資料館チェックにまわすように伝えた。そして、教員・資料館員はできる限り早くパネル・キャプションのチェックを行い、実習生の作業が滞らないように配慮した。

展示陳列作業については、フロアマーカの設置やライティングも含め、11月第2週の5日間で余裕のあるペースで作業が進んだ。同週前半でかなりの部分が仕上がりと、同週後半は不足分の追加や調整程度で済んだ。その一方で、実習内容の質は、過去の学生企画展と比較しても遜色なく、十分な水準を保っていた。基本的には展示班の実習生が主体となって作業を指揮していたが、27名の実習生全員がなるべく平等に展示陳列に関わるように、資料館側でもある程度作業内容・作業量

を調整した。

このような過程を経て、11月15日、令和3年度学生企画展「光をシコウする」は、無事開催にこぎ着けたのである。

残念ながら撤収作業だけは、オミクロン株による感染流行第6波が過去にないスピードで大きくなってしまったため、資料館職員が学生の代わりに行わざるを得なかった。それでも、学生企画展のほぼ全てが学生の手によるものであることに変わりなく、内容としては例年と同等の充実した実習となった。

企画展に伴う教育普及活動については、コロナ禍にあつてさすがにワークショップのような接触の多いものは断念したが、前述の通り、12月第3週に全5回でミュージアムツアーを実施した。各回中身が濃く、学生たちの創意工夫が随所に見て取れ、参加者は皆ツアーを楽しんでいた。ツアー前週の実習時間中にリハーサルを行い、その際に教員・資料館員が立ち会って改善の助言をしたのだが、本番では期待以上にブラッシュアップされていてその仕上がりに驚かされた。ツアー期間中、コロナ感染流行の波や大雪も運良く避けることができ、延べ100人近くもの参加があったのは資料館としても大変有難いことであった。なお、前述の通り、このミュージアムツアーの様子はYouTubeの金沢大学動画チャンネルで公開することにした。ツアー各回において、撮影当番の学生が資料館のハンディビデオカメラで録画し、それを学生たちが15分～20分程度に編集した。そのツアー動画5回分を、教員・資料館がチェックし、それを受けて学生が修正した。そして出来上がった動画を資料館が大学広報室に渡し、1月5・6・7・11・12日に1回分ずつ公開してもらった。いずれの動画も、ツアー内容が分かりやすくまとまっており、企画展の理解を深めることができるものとなっている。これらの動画は、現在も引き続き公開中であり、本稿の読者にはぜひ一度ご覧いただきたい。

以上、令和3年度学生企画展「光をシコウする」について、資料館所属教員の立場から述べてみた。今回も、新型コロナウイルスの感染の波に翻弄された部分が少なくないが、最終的にその困難を乗り越えて、今後の希望の光が見えるような学生企画展となった。金沢大学資料館は、今後もこのような実習の場として在り続けるべきであろう。実習生のリーダー・班長たちには、それぞれ『資料館だより』¹⁸に実習の感想を寄稿してもらったが、展示の達成感を記したものが目立った。第1章でも述べたように、これも、本学における学生企画展の大きな意義である。単なる資格取得のためではなく、共同作業で一つの目標を達成することの大切さを学んでもらえたのであれば、この学生企画展は「学芸員としての基礎知識・技能を実践的に身につける」という博物館実習の目的到達以上に、価値のあるものになったと言える。

(松永)

註

- 1 文部科学省2009『博物館学芸員ガイドライン』
- 2 笠原健司「金沢大学資料館における博物館実習の取り組み」『金沢大学資料館紀要』No.11、2016年3月、金沢大学資料館、55-56頁。
- 3 同論文57頁。
- 4 笠原健司, 笠原朋与, 野村将之, 虫明慧子, 渡辺司, 有村誠「学生による企画展の振り返り」『金沢大学資料館紀要』No. 12、2017年3月、金沢大学資料館、1-20頁。
- 5 小口歩美, 川邊咲子, 本庄有紀, 笠原健司, 菅原裕文, 河合望「学生による企画展の報告「ハカリモノ—文系学生が紹介する科学実験機器—」」『金沢大学資料館紀要』No. 13、2018年3月、金沢大学資料館、27-50頁。
- 6 鈴木彩可, 米田結華, 室谷颯花, 北澤怜子, 笠原健司, 菅原裕文, 河合望「学生による企画展の報告「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」」『金沢大学資料館紀要』No. 14、2019年3月、金沢大学資料館、19-38頁。
- 7 松下梓, 岡田優太, 櫻井宇佳, 藤本夏実, 笠原健司, 菅原裕文, 河合望「物録(モノローク) — 資料たちの波瀾万丈な「モノ」ガタリ」『金沢大学資料館紀要』No. 15、2020年3月、金沢大学資料館、1-20頁。
- 8 岡部睦, 松永篤知, 菅原裕文, 河合望「学生による企画展の報告「いろは—多彩な技術から見る色の世界—」」『金沢大学資料館紀要』No. 16、2021年3月、金沢大学資料館、1-22頁。
- 9 古田哲朗, 大木紗英子, 松永篤知, 河合望「学生による企画展の報告「写真で見る前身校 Part II ～キンダイ医学の源流を辿る～」」『金沢大学資料館紀要』No. 17、2022年3月、金沢大学資料館、1-24頁。
- 10 元金沢大学助教授の西村見暁氏の寄贈によるもの。
- 11 金沢大学資料館 Virtual Museum Project <<http://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/>>
- 12 金沢大学資料館 学術資料データベース <<http://cletdb.w3.kanazawa-u.ac.jp/>>
- 13 金沢大学50年史編纂委員会 1999『金沢大学五十年史通史編』金沢大学創立50周年記念事業後援会
- 14 所蔵場所については「金沢大学資料館」を「資料館」、「金沢大学附属図書館」を「附属図書館」と省略している。
- 15 ミュージアムツアーの各動画のURLは以下の通りである。
 - ・ 第1回「光の展示を企画する～私たちのシコウ～」
<<https://www.youtube.com/watch?v=Mb1CDeaqdIs&t=1s>>
 - ・ 第2回「光を求めた三偉人」
<<https://www.youtube.com/watch?v=nQ7F4dG2rmk&t=25s>>
 - ・ 第3回「光を志向する～身近になった光の技術～」
<<https://www.youtube.com/watch?v=hXkcCUIWIGM&t=9s>>
 - ・ 第4回「先人たちにとっての光、私たちにとっての光」
<https://www.youtube.com/watch?v=iTHUY3uY_Y8>
 - ・ 第5回「展示だけじゃない！企画展に溢れる様々な光」
<<https://www.youtube.com/watch?v=tROTN1GOHh8&t=303s>>
- 16 日本国内における新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) の動向としては、まず2020年1月

に最初の感染者が確認された。それから同年3月～5月頃に感染流行第1波が訪れ、特に4月7日～5月25日の間には国の緊急事態宣言が発出された（全都道府県が対象となったのは4月16～5月14日）。その後、第2波は2020年7月～8月頃、第3波は2020年11月～2021年3月頃、第4波は2021年3月～4月頃、第5波は2021年7月～9月頃、第6波は2022年1月～6月頃にそれぞれ訪れ、そのたびに緊急事態宣言（2021年1月8日～3月21日、2021年4月25日～9月30日）やまん延防止等重点措置（2021年4月5日～9月30日、2022年1月9日～3月21日）が繰り返された。

石川県でも、2020年2月に初の感染者が確認された後、概ね全国的な動向と同様の増減の推移を辿った。緊急事態宣言は第1波の時のみで、その後は2021年5月16日～6月13日（措置区域は金沢市）、2021年8月2日～9月30日（措置区域は金沢市）、2022年1月27日～3月21日（措置区域は県内全域）の計3回、まん延防止等重点措置が適用された。

- 17 2021年9月30日までの金沢大学資料館の利用制限としては、学外者に対して事前予約制を実施していた。これは2020年11月9日に始まったもので、予約人数・利用時間は1組最大5名まで、利用時間は30分以内という厳しさであった。さらに、2週間以内にまん延防止等重点措置実施区域または緊急事態措置実施区域（石川県を除く）に滞在歴がある方については、利用不可としていた。
- 18 多田明加・椿野智之・中村綸・中神悠雅・酒井真白「学生企画展を通して感じたこと ～企画から展示まで～」『金沢大学資料館だより』vol.65、2022年1月、金沢大学資料館、2-3頁。